

聖書：ダニエル 9：1～19

説教題：ダニエルの祈り

日時：2015年1月18日

9章前半にはダニエルの祈りが記されています。ダニエルはいつも祈っている人として6章10節に描かれていますが、ここに彼の具体的な祈りが記されています。しかしこれは特別な状況での祈りです。1節に「ダリヨスがカルデヤ人の国の王となったその元年」とあります。すなわちバビロンが滅亡して、メド・ペルシャが世界を治めるようになった新しい時代の最初の年です。その第一年に彼はエレミヤ書の言葉から、エルサレムの荒廃が終わるまでの年数が70年であることを知ります。これは具体的にエレミヤ書のどの箇所のことでしょう。一つは25章11～12節で、もう一つは29章10～11節です。29章10～11節：「まことに、主はこう仰せられる。『バビロンに70年の満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたにわたしの幸いな約束を果たして、あなたがたをこの所に帰らせる。わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。—主の御告げ—それはわざわいではなく、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。』」エレミヤはバビロン捕囚が起こった時代に活躍した預言者です。偽預言者は捕囚後すぐエルサレムに帰還できる！2年経てば戻れる！と述べて、人々はその教えを好みました。70年もかかると述べたエレミヤは迫害されました。しかしエレミヤが取り次いだ言葉こそ真実でした。ダニエルたちがこの地に捕囚されたのは紀元前605年で、この時、メド・ペルシャが世界を手中にしたのは紀元前539年でした。まだ70年には達していませんが、ほぼその時が近づいている。そして確かに時代が動いている。ダニエルはこのことの内に、いよいよエルサレムの回復が始まろうとしていることを知ります。このことが彼を祈りへと突き動かしたのです。3節：「そこで私は、顔を神である主に向けて祈り、断食をし、荒布を着、灰をかぶって、願い求めた。」ここに聖書と祈りの重要な関係を見ることができます。すなわち聖書の御言葉がダニエルを祈りへと導いたのです。

私たちは自分の祈りの生活を振り返ってどうでしょうか。イエス様の生涯も祈りで特徴づけられていました。聖書に出て来る多くの信仰者たちも、歴史の中で神に用いられた多くの器もみな祈りの人でした。では自分の祈りの生活は？と問うと、非常に貧しいことを告白せざるを得ないのではないのでしょうか。必死に祈るべき課題がある時は一生懸命祈るかもしれませんが、それもそれほど長続きしません。またそれを祈り続けても力が感じられない。本当にこの祈りは聞かれるのだろうか、という気にもなってくる。また祈ろうと思っても、どのように、何を祈ったら良いか分からないという経験をよくする。どうすれば私たちはもっと良く祈ることができるのでしょうか。その大切な原則がここに 있습니다。それは聖書に導かれて祈るということです。聖書に従って祈るということです。私たちの祈

りにビジョンを与えるのは聖書です。そこに神がご自身のお考え、ご計画、約束を示しておられます。それを知り、受け止める時に、私たちは祈りへ駆り立てられるのです。ダニエルもそうでした。彼はエレミヤ書を通して神の約束に触れた時、祈りへ導かれました。ですから私たちにとって大切なことは聖書とセットで祈る時を持つということです。聖書通読と合わせて、あるいは1節だけでも聖書を読んで、それからお祈りする。私たちは自分を見つめても、そこから良いことは何も出て来ません。しかし聖書に聞くことは神を見ることです。その神を見るところから、新しい世界が開かれて行きます。そして神の約束に立つ祈りは、確信のある祈りとなるのです。

さて、ではダニエルはここでどんな祈りをしたのでしょうか。彼は聖書から捕囚が間もなく終わると知りましたが、だからと言ってただ感謝する祈りをささげたわけではありません。彼がここで一番心を砕いて述べていることは何でしょう。それは罪の告白です。もうすぐ捕囚状態から解放される日が来ますが、なぜ自分たちはこんな状態にあるのか。それは罪のためです。そのことをダニエルは告白します。4～8節：「私は、私の神、主に祈り、告白して言った。『ああ、私の主。大いなる恐るべき神。あなたを愛し、あなたの命令を守る者には、契約を守り、恵みを下さる方。私たちは罪を犯し、不義をなし、悪を行ない、あなたにそむき、あなたの命令と定めとを離れました。私たちはまた、あなたのしもべである預言者たちが御名によって、私たちの王たち、首長たち、先祖たち、および一般の人すべてに語ったことばに、聞き従いませんでした。主よ。正義はあなたのものですが、不面目は私たちのもので、今日あるとおり、ユダの人々、エルサレムの住民のもの、また、あなたが追い散らされたあらゆる国々で、近く、あるいは遠くにいるすべてのイスラエル人のものです。これは、彼らがあなたに逆らった不信の罪のためです。主よ。不面目は、あなたに罪を犯した私たちと私たちの王たち、首長たち、および先祖たちのものです。』」

ここでダニエルの頭の中心にあったのは、神とイスラエルの契約関係のことです。神は一方的な恵みによって、イスラエルをエジプトの奴隷の家から救い出してくださいました。イスラエルはこの主に感謝して、十戒をはじめとする律法を守り行なう生活をするように求められました。その際、この律法を守り行なうなら、あらゆる祝福があなたがたに臨み、反対に聞き従わないなら、あらゆる災いがあなたがたに臨むと言われて来ました。申命記28章1～2節：「もし、あなたが、あなたの神、主の御声によく聞き従い、私が、きょう、あなたに命じる主のすべての命令を守り行なうなら、あなたの神、主は、地のすべての国々の上にあなたを高くあげられよう。あなたがあなたの神、主の御声に聞き従うので、次のすべての祝福があなたに臨み、あなたは祝福される。」 こう述べて、以下のところには様々な祝福が述べられています。しかしこれに従わない場合のことが15節以降にあります。「もし、あなたが、あなたの神、主の御声に聞き従わず、私が、きょう、命じる主のすべての命令とおきてとを守り行なわないなら、次のすべてののろいがあなたに臨み、あなたはのろわれる。」 そして様々な呪いのことが述べられますが、そこで捕囚という災

いも起こり得ることが述べられています。64～65 節：「主は、地の果てから果てまでのすべての国々の民の中に、あなたを散らす。あなたはその所で、あなたも、あなたの先祖たちも知らなかった木や石のほかの神々に仕える。これら異邦の民の中であって、あなたは休息することもできず、足の裏を休めることもできない。主は、その所で、あなたの心をおのかせ、目を衰えさせ、精神を弱らせる。」 まさにその通りのことが私たちの上に成就したのです、とダニエルは今日の 9 章の祈りの中で告白します。ダニエル書 9 章 10～12 節：「私たちは、私たちの神、主の御声に聞き従わず、神がそのしもべである預言者たちによって私たちに下さった律法に従って歩みませんでした。イスラエル人はみな、あなたの律法を犯して離れ去り、御声に聞き従いませんでした。そこで、神のしもべモーセの律法に書かれているのろいと誓いが、私たちの上にふりかかりました。私たちが神に罪を犯したからです。神は、大きなわざわいを私たちにもたらすと、かつて私たちと、私たちをさばいたさばきつかさたちに対して告げられたみことばを、成就されたのです。エルサレムの上を下ったほどのわざわいは、今まで天下になかったことです。」 神はこの契約に真実であられただけです。責められるべきは自分たちです。13 節では、災いがふりかかりながらも、なお主に立ち返ろうとしなかったイスラエルのことが述べられています。このようなイスラエルの中に自分も含めて、その罪を告白することにダニエルは心を注いだのです。

実にこれこそ、このダニエルの祈りから学ぶべきことではないでしょうか。彼はエルサレムの荒廃が終わりになるという約束を知って、ただ感謝しますと言ったのではないのです。神との和解のためにまず必要なのは、この罪の告白と悔い改めです。ダビデも詩篇 51 篇 4 節で「私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。」と告白しました。そのように自分の罪を認め、神の前にへりくだることを神は求めておられます。この道を通ってこそ、私たちはその先にある祝福にあずからせていただくことができるのです。

さて、この罪の告白とセットでダニエルが祈っているもう一つのことは、主の約束に基づく嘆願です。ダニエルはエルサレムの荒廃が終わるまでの年数が 70 年であるとエレミヤ書から知って祈りへ導かれましたが、主がイスラエルをこのようにあわれんでくださることについては、すでに前から言われていました。申命記 30 章 1～4 節：「私があなたの前に置いた祝福とのろい、これらすべてのことが、あなたに臨み、あなたの神、主があなたをそこへ追い散らしたすべての国々の中で、あなたがこれらのことを心に留め、あなたの神、主に立ち返り、きょう、私があなたに命じるとおりに、あなたも、あなたの子どもたちも、心を尽くし、精神を尽くして御声に聞き従うなら、あなたの神、主は、あなたの繁栄を元どおりにし、あなたをあわれみ、あなたの神、主がそこへ散らしたすべての国々の民の中から、あなたを再び、集める。たとい、あなたが、天の果てに追いやられていても、あなたの神、主は、そこからあなたを集め、そこからあなたを連れ戻す。」 ソロモ

ンも神殿奉献の際、I列王記8章47～50節で、この約束に基づいた祈りをささげています。ダニエルはこの神のあわれみが、70年が満ちようとするこの時に実行に移されることを知って、どうかそのようになりますように、そう導いてくださいますようにと祈ったのです。16～17節：「主よ。あなたのすべての正義のみわざによって、どうか御怒りと憤りを、あなたの町エルサレム、あなたの聖なる山からおさめてください。私たちの罪と私たちの先祖たちの悪のために、エルサレムとあなたの民が、私たちを取り囲むすべての者のそしりとなっているからです。私たちの神よ。今、あなたのしもべの祈りと願いとを聞き入れ、主ご自身のために、御顔の光を、あなたの荒れ果てた聖所に輝かせてください。」

この16～19節までの嘆願において特徴的なことは何でしょうか。それは「あなたご自身のために」といった言葉がたくさん使われていることです。17節：「主ご自身のために」。19節：「あなたご自身のために」。その他、「あなたの町」、「あなたの聖なる山」など、「あなたの」「あなたの」という言葉がたくさん出て来ています。すなわちダニエルの祈りは一言で言って神中心の祈りであるということです。彼はもちろんイスラエルの救いについて祈っているのですが、それは神の栄光と一致する仕方、いや神の栄光こそが高く上げられる中で考えられなければならないとしている。これは私たちの祈りのお手本である主の祈りでも教えられていることです。まず先に来るのは「御名があがめられますように」「御国が来ますように」「御心が地で行われますように」という神の栄光に関する祈りです。その下で私たちにに関する祈りは祈られます。私たちは私たちにに関する祈りを祈って良いのですが、それは神の栄光を第一に求める祈りの下で祈られなければならない。具体的にここでイスラエルの捕囚という問題は、イスラエルにだけ関わる問題ではなく、主の名誉に関わる問題です。イスラエルの神はご自分の民さえ守ることができないのだ！と外国の民にあざけられている状況がありました。ダニエルは捕囚からの救いを願いますが、何よりも主が正しく敬われ、本来あるべきようにあがめられることを第一の祈りとして願ったのです。

これは祈りから始まって私たちの生活すべてに当てはめられるべきことでしょうか。私たちは「食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現すためにしなさい」と言われています。すべての奉仕や交わり、仕事や学び、家庭生活・夫婦関係、様々なクリエーションも、……。それらすべてが神の御名がたたえられることとつながるように！そのように祈られ、また行なわれることが大切なことなのです。そしてそのように神の栄光を第一に求めて歩むところに私たちの幸いもあるのです(ウェストミンスター小教理問答問1)。

以上、9章前半のダニエルの祈り。ここから心に留めたいことをもう一度最後に二つ確認して終わりたいと思います。その一つは祈りにおける罪の告白の重要性についてです。私たちの祈りの中で、これがどれだけの位置を占めているのでしょうか。ダニエルの祈りから教えられることは、もっとこの罪の告白が私たちの祈りの大事な部分を占めるべきであ

るということです。行なった罪、言葉の罪、思いにおける罪、またなすべきだったのに行わなかった罪。ことあるごとに自らを振り返り、「この罪を御前に犯しました」「このことをしませんでした」と正直に申し述べる。そして憐れみと赦しを請い求める。これこそ回復への道です。

そしてダニエルの祈りから学ぶもう一つのことは、恵み深い神を仰いで祈るということです。神が恵み深い方であることを仰がなければ、私たちは祈りへ駆り立てられないでしょう。どうせこんな私が祈っても神は聞いてくださらないだろうと確信するばかりです。そしてそう考えたら、罪の告白もしようと思いません。益々さばかれるだけだからです。祝福から遠い自分を確信するだけだからです。ですから私たちはそうならないために聖書の言葉に聞いて祈るべきです。ダニエルはエレミヤ書に 70 年の後、神がイスラエルをエルサレムへ帰らせてくださるという約束を見いだしました。ここに神は罪人を顧みてくださる神であり、あわれみ深く赦してくださる神であり、ご自身の民を回復させてくださる神であることが証しされています。そしてこれはこの時代を越えて、神はご自身に信頼する者たちをこのように顧み、赦し、救い、きよめて、天の御国に導き入れてくださる方であることをあかしするものです。私たちは聖書の様々な御言葉を通してこの恵みの神を仰いで、祈りの生活を導かれないと思いません。その約束を胸に刻み、望みを抱いて罪を告白し、あわれみを請う者へ導かれない。そして祈りを通して、神が約束しておられる救いと祝福に生かされる幸いに歩みたいと思いません。